

# F/T12

FESTIVAL/TOKYO



隣人ジミーの不在 / 岡崎藝術座

作・演出：神里雄大

The Absence of Neighbor Jimmy / OKAZAKI ART THEATRE

Text, Direction: Yudai Kamisato

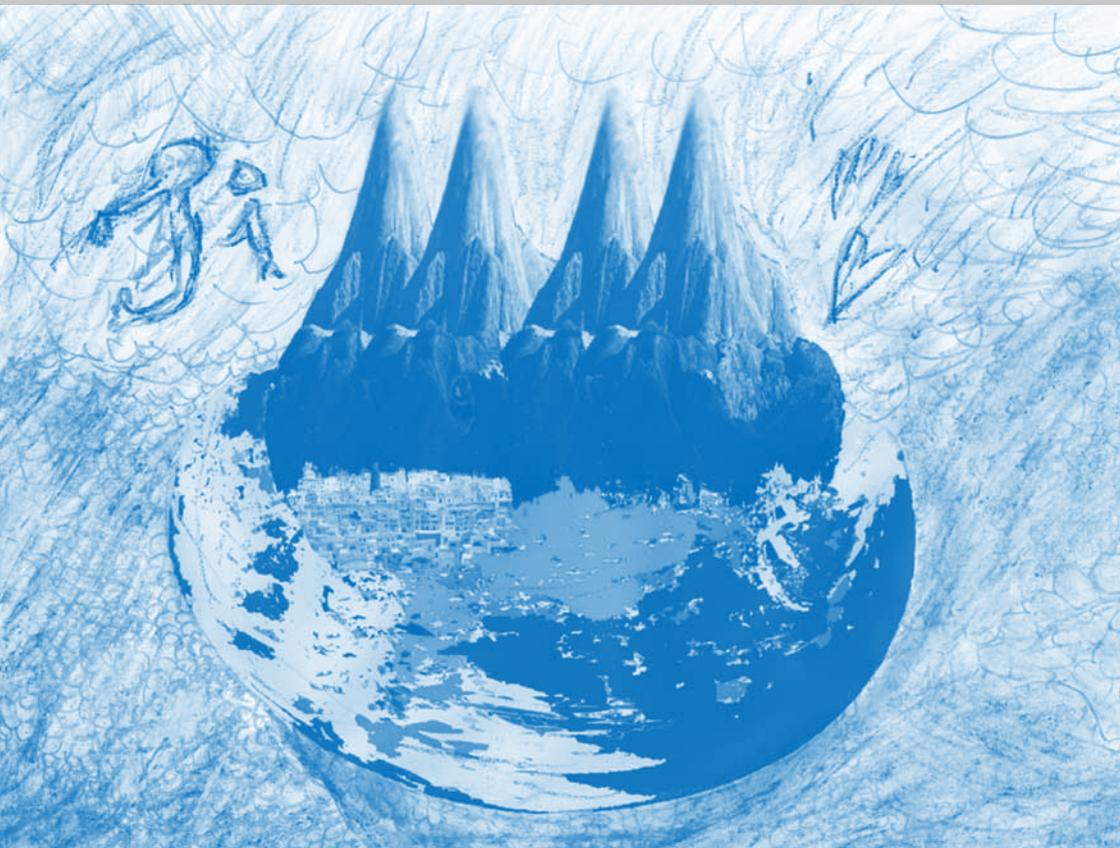
11/2 (Fri) - 11/6 (Tue)

あうるすぽっと  
Owlspot Theater



2020年オリンピック・  
パラリンピックを日本で!

© Yudai Kamisato



## “隣人=よく分からない人”をめぐって

——今回のタイトルにある“隣人”は、韓国や中国などの、東アジア諸国を念頭において考えたものだと思います。神里さんはなぜ、今アジアに関心を寄せられるのでしょうか。

前からなんとなく「アジアの中の日本」を考えなきゃダメだ、とは感じていたんですけど、今年初めてヨーロッパに行き、現地のアーティストと話してみたら、やっぱり向いてる方向や問題になるトピックが違うと気が付いて。イスラエルとパレスチナの宗教対立が話題になった時に僕が「じゃあ、(ユダヤ教、イスラム教にとって)仏教はどう思われているのかな」って聞いたら「仏教のことはみんなが好きだよ。アウト・オブ・サークルだし」と言われたんです。そういう環境で、どれだけ自分たちの問題意識を作品にしても、「民族的」な扱いをされるだけかもしれない。かといって「ヨーロッパの基準」に乗って評価されよう、みたいな考え方も健全じゃない。だったら、自分たちは自分たちの問題を自分たちの場所で構築していく方がいいなと考えるようになったんです。

——実際に、稽古の一部は韓国でされました。とはいえ、作中には、韓国での出来事が盛り込まれることも、現地の俳優が登場することもあります。

韓国で稽古をしたのは、最近の僕の自分の活動、創作の方法や考え方の問題で、作品全体がそんな話になったりするのはちょっと違うと思います。だからタイトルにも「ジミー」って付けて

はぐらかしているんですけど……。そもそも交流とか共同制作とか、正直うさん臭いというか、いきなり手をつなぐ前にもっと話し合うことがあるだろうって感じがして。そういうことより僕は、ふと気がついたら池袋は中国人ばかりだった、みたいなことの方が好きなんです。コンビニの店員はみんな中国人で、最終的には中国語できないと買い物できなくなった、みたいなことがあったらウケるなあとか……。

——じゃあ、滞在先はアジアならどこでもよかったんでしょうか。

今年の夏に台湾に行ったんですけど、「親日」のイメージがあるから、可愛い女の子が「遊びましょ」ってどんどん寄ってくるのかと思ってたんです。そしたら全然違って(笑)。大黒摩季をかけたら「『スラムダンク』ですね」って言われるような、文化が染みわたってるって意味での「親日」だった。結局、「親日」かどうかと、人と人の関係は別なんですよね。じゃあ、「反日」だと言われてる韓国ならどうなのかって興味が湧いたんです。それで行ってみたらやっぱり、日本文化が生活に根付いていて「どこが『反日』なんだよ、結局個人の話じゃん」って思われた。だから、いよいよ僕は「国家」ってものが分からなくなってきているんです。韓国に行って、日本と韓国の関係を考えてもどっかバーチャルなものにしか見えない。そういう変なゲームを言い訳にして、揉めたり、戦争したりするとしたら、いい迷惑です。だから



「古いクーラー」

© 富貴塚悠太



「レッドと黒の膨張する半球体」

© 富貴塚悠太

「日本と韓国の関係」っていう考え方は危険だと思う。近くに住んで、何考えてるんだか分からない人について考える、っていうくらいのつもりでいるのがいいんじゃないかと思います。

——創作の過程では、舞台上に現れない関係を含めた、ポスター大の相関図を書いたと聞きました。不可思議な“隣人”のリアルな存在感を大切にする一方で、俯瞰の視点も用意するのはなぜですか。

相関図は、最近聖書にハマってたこともあって、系図っぽいものを作ってみようかと、ノリで始めました。さっきの話とちょっと矛盾するんですけど、国家も地域社会もバーチャルだ、なんていったところで、現実には韓国や中国とのもめ事はあるわけですよね。だから、単に「自分と関係ないからどうでもいい」ってうのめやばい。そもそも「自分たちの衣食住に関係ないことだから」って話は、僕らみたいなことやってる人間が最も怒らないといけなくてこじやないですか。だから、ある程度の社会的背景や見えない人間関係も想定しないとダメだなと思います。

——隔絶された場所、穢された血、混血児……といった本作のモチーフは、震災後、F/T11で上演された『レッドと黒の膨張する半球体』や今春の『アンティゴネ／寝取られ宗介』とも通じるところがあると思います。

そうですね。最近は、「何を持って作るのか」という意識そのものが、変わってきてるんです。

以前は作品ごとにスタイルが変わることを良しとしてたんですけど、今はもう、そこはいつでもよくて。それよりは自分が大事にしたいトピックを更新し、深めていく方がいいかなと。

——『レッドと黒の～』以後、神里作品の持つ社会性、政治性が強まっているように見えるのは、そのせいですか。

以前、『古いクーラー』（10年）って作品で、日本の中国との関わり方をテーマにしたんですけど、それが全く伝わらなかったんですね。その頃の僕はアートが社会や政治に直接関わるのはスマートじゃないと思ってたんですが、結局はそれも根拠のない先入観で、それだけじゃ舞台は上手くいかない。そこで、もうちょっとだけ社会に近づいてみようと思って作ったのが、街や人、いろんなもの間にある「境界線」をテーマにした『街がない』（11年）でした。

だから『レッドと黒の～』以後でガラッと作風を変えたつもりはないんです。ただ、東日本大震災が起きて「自分と社会は無関係ではいけない」ということが、僕の中でもよりクリアになったことは確かです。とはいえ、最近は「震災後」という状況も日常になっちゃった面があるので、今回の作品で無理矢理それを想起させるのはどうなのか……全くちづつかないのもおかしいし、そのへんのバランスは難しいなとも思ってるんですけど。

（2012年10月11日／取材・文＝鈴木理映子）

# 出かけた稽古場——韓国滞在記

神里雄大

## 10月2日

4時、ソウルに着く。アテンドをしてくれる植松さんと合流。昨日までアメリカツアーに行っていた太一さんだけ福岡から来るので待っている。到着したはずの時間から1時間半経過、現れないのでみんな憶測を飛ばし不安になるも、最終的には無事合流。安堵。植松さんからいろいろ情報を得る。バスに乗ってホテルへ。混んでいて、僕は短髪のおじさんの隣にいま座っている。長袖シャツに黒めのスラックス。徹夜で作業してそのまま来たので、眠くて外の景色はまだ見れていない。見た。地平線のように光がささやかに見える。街までは離れているらしい。初の韓国にきた。初めて、アジアの大陸に(土地が)つながっているところへ来た。と思ったろうとうとしていた。気づくとビル群が迫っている。車内にはTVモニターがあり、ニュースが流れている。NHKと似ているスタジオが写っている。アジア初心者の僕に、まずは自分の生活圏との違いや類似点を探す時間がやってくる。

バスを降りる。繁華街らしいが、薄暗い感じがした。それがいいなと思った。人はいっぱい歩いている。ホテルにチェックインした後、夕飯を食べに出た。チヂミ。いまや日本では食べられないユッケも食べた。店員のおじちゃんがやけに愛想がいい。皆でうまいうまい言いながら、武谷さんはずっと韓国語の勉強をしている。稲継は浮かれている。ビールを飲んで、太一さんと話す。そして、それから悲しい気持ちになった。なぜか。いい俳優たちが揃っている。それとは関係なく、ビール飲んでトイレ行って、悲しい気分になっている。これから一週間、なぜ悲しいのかを探る

旅にもなるような気がするが、寝てないせいかもしれない。明日は稽古。

## 10月3日

けっきょく朝まで作業していたので、13時の集合に寝坊する。武谷さんが部屋まで来て起こしてくれた。地下鉄に乗って、稽古の前に博物館へ。きれいな地下鉄環状線。優先席はぜったいに座ってはいけならしい。車内で、もし有事のときは地下鉄がシェルターです、というような映像が流れている。降りた駅は、緑多く道の広い、気持ちのいい街で、昼間のソウルのその街は道の感じやバスなど、なんだかヨーロッパで見たものに似ているなどと思った。博物館は西大門刑務所歴史館という、かつて日本占領期に思想犯を収監していたという旧刑務所だった。Japaneseは日帝と訳されていた、そしてムードを出す演出が過剰だと思った。でも、日本が被害者的な博物館は行ったことがあっても、日本の加害者的ポジションにいる展示物を見たのは初めてかもしれないと思った。死刑場跡を見て、そこで行われていた処刑の景色を今に持ってこようと想像していたとき、時間と場所の連続性と国家というあやしいイメージが自分に浸食してくるのは悲しいと思った。いったい自分が何をしたのだろう、でも自分の国はこの博物館に責められている。冷麺などを食べて稽古場へ。

地下3階の大きい駐車場の隣にある稽古場。キャストが揃って、台本あつての稽古は初めて。ソウルだろうが横浜だろうがどこだろうが、稽古しているときは同じ。この場所で稽古初めを迎えられるのは、うれしいと思った。明日は「脱北者

と行く38度線ツアー」に参加する。朝7時出発。起きれるだろうか、まだ台本の手直しなどしたいと思っている。

#### 10月4日

昨日もけっきょく朝5時まで作業していて、ほとんど寝てないが起きた。朝7時から深夜2時まで。今日は、路線バスに初めて乗った。主張と機微を効かせないと乗ることさままならない。降りるときも、あらかじめ降り口に近いところへ移動しておいたほうがいい。パラグアイに住んでいたとき、バスをヒッチハイクのように手を出して止め、降りたい場所のいくらか前でブザーを押し、それから運転手の感覚で止まったところ下りた。毎回、今日は200mくらい行きすぎた、今日は100m手前だった、ということをくり返していたのを思い出した。いつのまにか、南米との共通点を探そうとしている。その後、ソウル随一の繁華街で髪を切った。パラグアイで髪を切ったとき、仕上げに七三にされることが嫌だったのを思い出した。髪を切られるというのは、無防備に刃物を持った人が後ろに立つことを許容するわけだが、どのタイミングでそれが可能になるのだろう。そんなことと、今朝行った38度線の非武装地帯の観光地と遠くに見える北朝鮮の町のこととが、ごちゃごちゃになって言葉にするのが難しいという感想が今日の感想です。

#### 10月5日

起きて稽古場に行き、稽古した。まだ台本を渡したばかり、直しも入るので、セリフが入っていない。稲継が少し体調を崩したらしい。稽古後

はサムギョブサルを食べたが、味が薄いので塩を入れ、入れすぎてしょっぱくなった。その後、みんなと別れ、ひとり電車とバスを乗り継いで、炭釜のサウナに行った。すばらしいところだった。またバスと電車を乗り継いで帰り、ホテルの最寄り駅からの道すがら、一杯飲もうと入ったバーはスナックみたいなどころだった。値段がおかしかったので、丁重に断りホテルに帰ると、どこかに行っていた武谷さんと遭遇したので、誘って別のバーで1時間飲んだ。という、差し当たって特別なこともない1日で、4日目でそういう状態になったことがよかった。あとは韓国語がわかったらいいな。いまのところ、ソウルはとてもいいところだという印象だ。だが、今日ふつうの生活をしたからと行って、明日もまたそうとは限らない。明日はもっと稽古を活発化させたいと思う。

#### 10月6日

今日は午前、ちょうど行われていたハイソウルフェスティバルのプログラムの一つに参加し、ソウルの市民と話をした。デザイナー、パン職人、日本とのハーフの大学生。当たり前だが、やっぱり個人でしかない。野暮だと思ったが、対日感情についても聞いてみた。国と個人は別だよね、というような返答。やはり野暮だったし、だからといって個人と国とを安易に別と考えるのは、理想的すぎるとも思った。それを聞いていたときの自分は、ただの個人とは言えなかったからだ。それから稽古に行き、その後ネットカフェでプリントアウトし、スーパーでキムチやフルーツを買った。僕はいつもどこか別の土地に行くとき、それが国内であっても国外であっても、そこに住めるか

どうかが一番の関心事だ。だから僕は『街などない』という作品を作ったが、街に興味がある。その街でそこに住む人と自分がどう交われるのか。できればいろんな街に住みたい。僕には対立する国なんかいらなくて行き来できる街さえあればいいと最近では考えるようになってきている。これも理想的な話だけど。そんなことを考えながらホテルに帰って買った物を食べて、テレビをつけたら、映画『ガリバー旅行記』をやっていた。なんとなく見ていたが、とてもよかったので今度の新作に生かせないかなと思いつきで考えている。

### 10月7日

ソウル滞在最終日。明日の早朝にホテルを出ることになっている。起きる自信がないので寝ないことに決めて、いまはホテル近くのバーに来た。今日は朝から稽古し、夕方に終わり、そのあとソウルのフェスティバルのディレクターとしゃべることができた。稽古だけで来るのはやっぱり珍しいみたいだ。なぜそうしようと思ったか、の話から自然に日韓関係の話になった。昨日書いたような話をしてみた。で、一番気になるのは、歴史のことという話になった。でも僕はアメリカのことは留学していたし、教科書でいろいろ学んだ記憶もあるし、だが韓国やほかのアジアについては本当に無知なのだった。いったい隣人とはなんなのか、こんな飛行機で3時間もかからない、下手をすると新幹線で大阪へ行くよりも安いかもしれないようなところにいったいなぜこんなにも無知でいられたのか。僕は国とか政府とか関係なくごく個人として自分を恥じたとともに、じゃあいつ

たい隣人でないと暗黙のうちにしている人や街の何を知っているのか、ということも思った。反省ばかりである。そしてきっとまた反省を生かせない日々を送るのだ。これだってこんなことを書いたって、何になるのだろうか、かしら。それから韓国のアーティストで去年日本のF/Tで上演していたグムヒョンとFacebook経由でチャットした。今度は、作品のコラボレーションではなく、環境のコラボレーションの話をした。懲りないというか図々しいほどである。とりあえず時間も遅かったし、今度また飲みに行こうという話になった。で、外に出てきたわけである。全体的にネガティブな感じになっているのは、飲んでいるからであるが、別にネガティブではない。本当でない。ひとりで午前3時、さみしく手酌でビールを注いでいる。

### 10月8日

機内でしょうもない映画を見ながら寝て、気づくと着陸体勢に入っている。成田について、スカイライナーに乗った。それからF/Tの事務所顔を出していろいろかと電話してみたが、休日だったのでかからない。帰宅して洗濯機に服や下着を投げ込んで、カレーを食べて寝た。1週間のソウル滞在中で1キロ強太ってしまったので、いい加減体を絞ることをしなければならない。帰国するいつもそうだが、特に総括する気分になれない。旅行という気分が少ないからなのだろうか、しかしほかの人も総括なんてしていないのかもしれない。割と移動の1日だったので、特に感じることもないからこの日記もなんだか義務感だけがある感じがしている。1日休んで、また稽古が始まる。

#### 神里雄大 演出家・作家・岡崎藝術座主宰

1982年ペルー共和国生まれ川崎育ち。2003年早稲田大学在学時に岡崎藝術座を結成。06年『しばをつかまれた欲望』で利賀演出家コンクール最優秀演出家賞を最年少で受賞。09年『ヘアカットさん』が第54回岸田國士戯曲賞最終候補作品にノミネート。近年は、演劇作品の演出のほか、小説やイラスト、詩の分野においても活動の幅を広げている。F/Tには、F/T10公募プログラム『古いクーラー』、F/T11『レッドと黒の膨張する半球体』に続き3回目の登場となる。



© 富貴塚悠太

作・演出：神里雄大

出演：武谷公雄、稲継美保、山縣太一(チェルフィッチュ)

美術：神里雄大

照明：黒尾芳昭

音響：高橋真衣

舞台監督：寅川英司+鴉屋

衣裳：天神綾子

映像：ワタナベカズキ

撮影：富貴塚悠太

演出助手：小野正彦

英語翻訳：門田美和

韓国語翻訳：李丞孝

制作：急な坂スタジオ

協力：梅山景央、榎松侑子

広報協力：precog

製作：岡崎藝術座

共同製作：フェスティバル/トーキョー

助成：公益財団法人セゾン文化財団、芸術文化振興基金

主催：フェスティバル/トーキョー、岡崎藝術座

F/T スタッフ

制作統括：武田知也

制作：喜友名織江

フロント運営：北澤美未子、清水美峰子

プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/T クルー

宇都宮千陽、緒方彩乃、尾澤弥生、崎濱恵梨、佐藤杏子、佐藤友香里、

永井彩子、松田早絵、丸山未来

Text, Direction: Yudai Kamisato

Cast: Kimio Taketani, Miho Inatsugu, Taichi Yamagata (chelfitsch)

Stage Design: Yudai Kamisato

Lighting: Yoshiaki Kuroo

Sound: Mai Takahashi

Stage Manager: Eiji Torakawa + Karasuya

Costumes: Ayako Tenjin

Video: Kazuki Watanabe

Photography: Yuta Fukitsuka

Assistant Direction: Masahiko Ono

English Translation: Miwa Monden

Korean Translation: Seunghyo Lee

Production: Steep Slope Studio

Support: Akio Umeyama, Yuko Uematsu

PR Support: precog

Produced by OKAZAKI ART THEATRE

Co-Produced by Festival/Tokyo

Supported by The Saison Foundation, Japan Arts Fund

Presented by Festival/Tokyo, OKAZAKI ARTS THEATRE

F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda

Production Co-ordinator: Orii Kiyuna

Front of House: Fumiko Kitazawa, Mihoko Shimizu

Program Director: Chiaki Soma

F/T Crew

Chiaki Utsunomiya, Ayano Ogata, Yayoi Ozawa, Eri Sakihama, Kyoko Sato,

Yukari Sato, Sayako Nagai, Sanae Matsuda, Mirai Maruyama

## フェスティバル/トーキョー組織委員

### Festival/Tokyo Organization Committee

天牛大生	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社代表取締役会長兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
鶴川希雄	演出家
野田秀雄	演出家
野村高	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (五十音順)
Ushio Amagatsu Hiroyuki Ogita Akihiko Senda Takao Nagai Yuko Ninagawa Hidetoshi Noda Man Nomura Yoshihara Fukushima	Choreographer, Director Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd. Theatre critic Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO) Director Director Director Kyogen actor Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会

東京都、豊島区、

東京文化発信プロジェクト室、東京芸術劇場、公益財団法人東京都歴史文化財団、

公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, Arts Network Japan(NPO-ANJ)

共催：社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、チノコト株式会社、株式会社白水土社

Special co-operation from SEIBU HOKUICHOINTEN, TOBU DEPARTMENT STORE HESKURUI, Sunshine City Princess Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakushusha Publishing Co., Ltd.

協力の場：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、

豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会

In co-operation with The Tokyo Chamber of Commerce and Industry, Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社アスターハリス・カンパニー、

有限会社ネビュラエストラサポート(公募プログラム)

PR Support: Poster/Hall's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for FT/ Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3FM、新潮、ART iT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3FM, SHINCHO, ART iT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年(2012年)10月27日(土)～11月25日(日)



## フェスティバル/トーキョー実行委員会

### Festival/Tokyo Executive Committee

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化・商工文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長
	裕正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 代表
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	榎井健策	北海道弁護士会(弁護士)

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City  
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director of Toshima City  
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshida, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City  
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section  
Hideo Onuma, Director of Secretary of Toshima Future Culture Foundation  
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation  
Naoko Hasegawa, Arts Network Japan Representative  
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director  
Supervisor: Kazumi Anagaki, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City  
Legal Advisors: Kenzaki Fukui, Hisato Kitazawa (Kotou Dori Law Office)

## フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

### Executive Committee Office

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局長補佐	小島寛大
制作総括	武田知也
制作	河合千佳、喜友美麻江、小森あや、相山由香、 戸田史子、藤井さゆり
メディア戦略	松本花音
プログラム・リサーチ	クラウハイム・ウルリケ
アジア事業コーディネート	小山ひとみ、李丞孝
票務管理	兵衛理江、岡内淳
チケットセンター	佐々木由希子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色真好
経理	堀久美子
小製作アシスタント	小野塚英、砂川史織、田中沙季、田野入涼子、中山亜以
メディア戦略補佐	冠根葉奈
アジア事業コーディネート補佐	吉岡真衣子
インターン	伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里

技術監督	賀川英司
技術監督アシスタント	河野千鶴
照明コーディネーター	佐々木真衣子(株式会社フクター)
音響コーディネーター	相馬千秋(有限会社サウンドエクス)
アートディレクション+デザイン	アジール(佐藤直樹+中澤耕平+谷陽子+穂永明子+菊池昌良)
ウェブサイト	濱田真一+田中裕也(株式会社ロフトワーク)
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリュース・ウィリアム
出版	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子
編集・執筆 (TOKYO/SCENE)	影山裕樹

Program Director: Chiaki Soma  
Administrative Director: Naoko Hasegawa  
Assistant Administrative Director: Hirotoomo Kojima  
Production Manager: Tomoya Takeda  
Production Co-ordinators: Chikara Orie, Kiyomi Kiyama, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujiki  
Ticket Administration: Rie Tagahara, Fusuko Shihada  
Program Research: Ulrike Krauthelm  
Asia Projects Co-ordinators: Hitomi Oyama, Seunghyo Lee  
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Makio Sasaki  
Ticket Office: Yumiko Sasaki, Kamiko Sato  
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki  
Accounting: Kamiko Tsutsumi  
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozuka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanohri, Ai Nakayama  
Assistant Media & Strategy: Manana Kanamori  
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Makio Yoshioka  
Trainees: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tabei, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki  
Technical Director: Eiji Torikawa  
Assistant Technical Director: Chikara Kono  
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)  
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)  
Art Direction+Design: Asyū (Naoki Sato + Kouhei Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)  
Website: Shinichi Hamada+Yoko Tanaka (Ito+Tanaka)  
Public Relations: Masako Taira, Akhironochizuki  
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews  
Merchandise: Jun Watanabe  
Editor/Writer: Rieko Suzuki  
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kagayama

FT/クルー：会津麻美、青島美和、安達彩、石引康子、一ノ瀬真志、若城幸志、止村康政、宇都宮千晴、内海ささき、遠藤乃判子、大泉尚子、大貫啓子、大庭愛音、岡崎由子、緒方彩乃、岡本光代、岡本佳子、尾澤奈生、小野千尋、加藤真帆、鹿子不直美、金子穂高、川口 潤、木口七海、木下玉美、金セツム、計智繪、相谷佳美、黒沢友実、黒沢寛子、齊藤美音、齋藤絵里佳、滝澤梨梨、佐藤友香里、佐藤音子、霜島咲子、柴田知子、鈴木智香子、間島弥生、高橋悠祐、田中友香、寺本奈津美、照田静香、陶田菜子、中村真樹、中村みづみ、中山由紀、西岡宇行、能戸みな美、畑端富美、初村知美、花田雅美、早川幸菜、林原菜、人見真央、廣瀬加乃、福原麻梨子、福村 祥、藤原松太、船山結菜、増尾圭、松嶋理奈、中村早絵、本本雄哉、丸山未生、三橋泰正、岡 勉、矢島朝子、船内聖司、山田布紀、山室木園、山分可子、丹野亜希、吉田由貴、米谷今日子、渡辺 更

FT Crew: Minami Aizu, Miwa Oshino, Aya Akashi, Yasuko Ishikubo, Takashi Ichinose, Taito Iwaki, Yasunasa Usugui, Chiaki Utsunomiya, Chiaki Utsunomiya, Noriko Ozumi, Ozumi Naoko, Keiko Oga, Aika Omichi, Yuko Okazaki, Aoyu Ogata, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Okamoto, Yuyo Otawo, Chihiro Ono, Maho Rato, Naomi Kaneko, Joy Kaneko, Akane Kawaguchi, Namiko Kiyochi, Tamako Koyama, Saorin Kim, Chiyo Kyo, Yoshimi Kiritani, Tomomi Kurokawa, Hiroko Kozaki, Naomi Sakai, Eriko Saito, Eri Sakikawa, Yukiko Sato, Kyoko Sato, Mumeo Shimotani, Tomoko Shibasaki, Chikako Suzuki, Yayoi Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Tokumura, Xuru Tani, Sayoko Nagai, Naoko Nakamura, Mimihi Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nakasaki, Mirami Noto, Fumi Hatase, Kazumi Hatsumura, Masami Hanada, Haruna Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Hommi, Kano Hirose, Mariko Fukumura, Kenji Furukawa, Kenta Fujiwara, Yuna Funakawa, Kei Masakawa, Rina Matsushima, Sae Matsumoto, Yuya Matsumoto, Mirai Maruyama, Yasunasa Mizuno, Hyemin Min, Aya Tojima, Saeji Tanaka, Yuki Yanaguchi, Kizono Yamamura, Masashi Yamawaki, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonemitsu, Sara Yamashita

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局  
発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会  
アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYU)  
オペレーション：小川 剛  
印刷：アトム株式会社  
発行日：2012年11月2日  
禁無断転載

お問合せ先  
フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局  
〒170-0001  
東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内  
TEL: 03-5961-5202  
HP: http://festival-tokyo.jp/